

# 幼児教育に於ける體育の重要性

東京文理科大學教授 文學博士 寺澤嚴男

二

世に園藝を嗜み愛する者が、菊作りや朝顔の培養なきに浮身をやつす楽しみ、或は早春の芽立ち又はすくく繁り行く初夏の翠りを見る喜びの如きは、主として其の發育の變化の著しきを目のあたりに見る事が出来るが爲めであるやうに思はれる。我等が養育又は教育の道も亦、我が手鹽にかけつゝある者の心身の發達し行く様をあからさまに目にする事が出来、且つ我が期待せる變化が顯著なれば顯著なる程、喜び深く楽しみ多きは云ふ迄もない。人間の發達に於いて其の變化の最も驚くべく且つ興味深きは、胎生期に於ける身體の發達、嬰兒期幼兒期に於ける精神の發達、若くものはない。

個人の意識は果していつの頃より現れ始めるのであるか。それは既に母の體內にある胎兒期の終りの頃よりであらうか、或は生誕後始めて大氣に觸れ、眼を開いて光りに接する頃に、漸くにして意識の曙光が現れ始めるのであらうか。妊娠第五ヶ月の頃から既にそろ／＼胎動が始まるのであるが、胎動は胎兒身體の内外に起る何等かの刺戟に依つて起るものに見なければならず、而して斯かる刺戟は、單に胎兒の身體的反應を起す許りではなく、同時に極めて隱微曖昧ではあるが、既に意識の萌芽とも云ふべきものを、胎生期の終りに近づいて既に相當發達せる神經系統中に、生ぜしめつゝあるものとも考へられない事はない。併したまへかゝる想像が許さるゝにしても、元よりそれが生誕後に於ける意識よりも明確

なるものであるは考へられがたく、而して生誕直後に於ける意識は、元より極めて模糊たる黎明期の状態にあるに過ぎぬのであるから、何れにしても實際的には、先づ意識は生後に始まる云つて毫も差支へがない。即ちたまへ精神の物的基礎としての神経系統の大體の形態的規模だけは、嬰兒生誕の際に於いて既に略々完成に近づいて居るもの云つてもいい程であるにも拘らず、精神其の物の發達は、生誕後に始まる云つてもよいのである。されば生誕後に於ける精神的發達は、眞に目ざましきものがあるのは當然である。今嬰幼兒期に於ける精神的發達を仔細に考察する時は、例へば幼兒の或る時期に於ける言葉の發達なきに於いて之を見るが如く、眞に飛躍的急進的であり、何故にいつ如何にして斯かる域に到達し得たかに驚かざるゝ場合が甚だ多い。斯くの如きは決して唯教へて後到り得るものではなく、模倣に依つてのみ若しくは學んでのみ始めて獲得し得るものではないやうに思はれる。之は生誕せし時既に遺傳に依つて精神の物的基礎、即ち神経系統の機構が或る程度迄出來上つて居るが爲めであるかも知れぬ。何れにしても、經驗或は教育の力よりも、彼等の内部に躍動せる自然の發達の生命力が、如何に強大不可思議なるものであるかを、想像するに餘りがあると思ふ。

併し其の發達の變化が、一層著甚にして且つ更に興味深きは、實に胎生期に於ける身體的發達である。思へば今迄世界のどこにも無かつた一つの新たなたましひが、しかも偉大深遠瑰麗にして神變不可思議なるものも成り行く可き貴くも奇しき此の人間の魂なるものが、ふみ天地の間に小さき肉塊の生れ出づるに共に、恰も無より有を生ずるものゝ如く、いつこより來ることもなく次第々々に現れ出づる此事實は、世にもいふ不思議にいふ興味ある事ではあるが、それにもいや増して驚かれるは、胎兒の身體的發達過程の變化の顯著さこそ不思議さである。細微極小なる細胞が、分裂に分裂を重ねて、始めは唯丸き小毬の如きものとなり、更に進んでは或は蟲介の如く、或は蠨螋の如く、或は虵龍の如く、或は魑魅の如く、或は豚兒の如く、遂に最後には人間の形態をなすに至る迄の發達は、之を生誕後に於ける精神的發達に比するに、

一層飛躍的急進的であり、一層其の内部に存する自然的發達的生命力の偉大なる發露に驚かされる次第である。

## 二

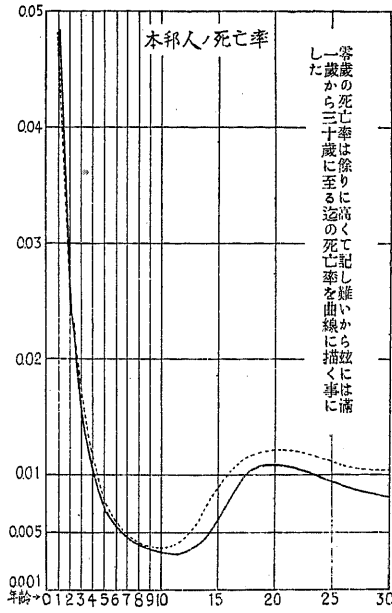
斯く心身何れの場合に於いても、其の内部の發達力は、概して發達の當初程著大に、發達の後期に至るに従うて、其の働きが次第々々に衰へ行くのを常とする。而して其の發達力の旺盛なる間には、唯其の發達に必要な資源の供給を怠らず、其の發達を阻碍す可き事情をさへ發生せしめぬことに注意するならば、之を其の赴く自然のまゝに置くも、多くの場合其の發達は隆々として獨り旺盛を極めるのを見るものである。即ち胎兒期にあつては、其の身體的發達の資源はおのづから母體の血液に依つて供給せられるが故に、胎兒の發達を阻碍すべき事情をさへ母體に起らしめなければ、其の發達は思ひのまゝに躍動發現し、其の軌道のまゝに進んで、何の力ぞや此の巧妙比類なき人のからだを、僅々二百八十日にして作り上げるのである。併しその事は嬰幼兒期に於ける精神的發達に就いても、稍々同様の趣ある事を見出し得るのである。即ち此の時期に於ける精神的發達は、其の心的内部的發達力の極めて強力なる初期に屬するが故に、之に對する周囲の者の働きかけは、嬰幼兒の精神的發達の資源となるべき經驗をば、其の發達の時期に應じて、適當なるものを適當なる量に於いて供給する事、其の發達を阻碍す可き條件をば、出來得る限り遠ざける事に存するのであつて、其れ以上の人爲、例へば工みて之を攝取せしめ消化せしめ同化せしめんことを働きかけの如きは、それ程には必要でないやうに思はれる。併し低能兒異常兒に對する働きかけに至つては、又別種の努力を要する事云ふ迄もないが、普通兒に對しては、元よりさ程の事はなすすとも、彼等の有する内部の自然の強い力を以てぐんぐん獨り伸び行き得るを見るのである。但し上に舉げた供給と排除との努力と雖も、元よりそれは非常に困難であり、専門的技能を必要とするものであるから、普通の家庭の力だけでは、とても出来るものではない事をも知らなければならぬ。

さて嬰幼兒期に於ける身體的發達の方は、之は稍々其の趣きを異にする點があるのである。即ち前にも述べたやうに、其の發達の最も旺盛なる時期は、最早既に胎生期に於いて経過してしまつて居る。勿論出生後に於ける身體諸器官の發達も、唯其の大きさに於いてのみ増加する云ふのではなく、身體諸器官各部の大きさの割合も多少は違つて行き、又其の微細な構造も多少は變化する。併しそれにも拘らず生れ出づる時に於いて、其の形態及び構造は既に畧々完成して居り、主として其の大きさに於いて増加して行くのである云ふ事が出来るのである。前に述べた神經系統の如きも、例へば大腦皮質を構成する成層の状態、神經細胞の形態及び排置の如きは、生誕後に於いても徐々に相當の變化を呈するものではあるが、併しそれとも矢張り大體の形態的規模は、既に生誕の際に出来上つて居る云つてもよい。されば其の内部に躍動せる發達力は、生誕後に於いては之を胎兒期に比するに、既に著しく衰へて居るものと見なければならぬ。のみならず今迄母體內にあつて十分に保護せられて居つた小なる身體が、急に外部に出て種々なる抵抗刺戟に暴露せられる事なるのであるから、相當外界に適應し得るに至る迄は、極めて注意深き保護を必要とする事は勿論である。母體內にあつた時は、冷い空氣に觸れる事も又それを吸ひ入れる事もなく、病原菌を直接吸ひ込んだり飲み込んだりする事もなく、直接飲食物を攝取せなければならぬ必要もなかつた。それが急に是等の働きを營み是等の危險に暴露される事となつたのであるから、一方では是等の危險を避ける事に勉めると共に、他方では是等の危險に抵抗し得るやうに鍛鍊をも加へて行かねばならぬ。即ち保護と鍛鍊との間を、所謂七分三分のかね合ひで進んで行かねばならぬ所に、細心の用意を必要とするのである。

### 三

次に内閣統計局編纂の帝國統計年鑑に依つて、先づ我國內地人の零歳より三十歳に至る迄の死亡率を見るに次のやうで

	男	女
0 歳	0.16204	0.14400
1 ,,	0.04845	0.04757
2 ,,	0.00611	0.02627
3 ,,	0.01655	0.01741
4 ,,	0.01050	0.01146
5 ,,	0.00704	0.00776
6 ,,	0.00534	0.00575
7 ,,	0.00458	0.00490
8 ,,	0.00392	0.00415
9 ,,	0.00341	0.00375
10 ,,	0.00317	0.00373
11 ,,	0.00307	0.00386
12 ,,	0.00314	0.00435
13 ,,	0.00357	0.00562
14 ,,	0.00452	0.00726
15 ,,	0.00597	0.00901
16 ,,	0.00766	0.01026
17 ,,	0.00920	0.01115
18 ,,	0.01032	0.01167
19 ,,	0.01083	0.01199
20 ,,	0.01080	0.01208
21 ,,	0.01060	0.01214
22 ,,	0.01039	0.01205
23 ,,	0.01020	0.01181
24 ,,	0.00091	0.01147
25 ,,	0.00951	0.01117
26 ,,	0.00911	0.01091
27 ,,	0.00879	0.01081
28 ,,	0.00851	0.01068
29 ,,	0.00832	0.01054
30 ,,	0.00823	0.01045



ある。

即ち零歳の時(生後満一歳に至る迄の間を云ふ)に最も死亡率が多く、之より満四歳頃迄激減し、尙男子は満十一歳に至る迄、女子は満十歳に至る迄は次第に減少し行き、茲に至つて死亡率最少の時期に到達し、之から又心身の大動搖期大轉換期である青春期に近づくに従うて、再び次第に死亡率が増加し行き、男子は十九歳女子は二十一歳に至つて、第二の死亡率最高潮期に到達し、之より再び徐々にして少し宛減退し行くのを見るのである。されば幼稚園期で

ある満四五歳の頃は、健康力は既に餘程増加して來ては居るのであるが、併し尙其の途中にある事であるから、小學校期及び中等學校前半期に比較するに、まだく身體的には十分の戒心を要する時期である云はなければならぬ。敍上の統計は大正十年から同十四年に至る迄の五ヶ年間の統計に基づいてなされたものであるが、斯かる趨勢が果して年々如何や

うになりつゝあるかを、同じく帝國統計年鑑に依つて、大正十三年から昭和六年に至る迄八年間の死亡千分比例について見るに、大體に於いて零歳から滿四歳に至る迄の死亡は年々少し宛減少しつゝあるが、滿五歳から滿九歳に至る迄のものは（此の間のものは、帝國統計年鑑では一括した統計だけしか記載されて居ないから、各年齢については知る事が出来ぬ。昭和四年に至る迄は次第に増加し、それから昭和六年に至る二ヶ年間は又少し宛減退して居る。されば此の點から云つてもまだ中々安心する所まで行かず、且つ幼稚園時代に於ける幼児の死亡率を歐米諸國のそれと比較するに、我が國の方著しく多い事でもあるから、此の期に於ける衛生と體育は、決して警戒の手を緩めてはならぬと云はなければならぬ。

次に滿四歳の兒童の死因を昭和六年度の統計に依つて、二十六種の死因中其の数の多きもの七種だけを、其の順序に従つて擧げて見るに、下痢及び腸炎に依る死亡が最も多く、之に次ぐのが腦膜炎、更に肺炎及び氣管枝肺炎、腎臓炎、外因死、ヂフテリア、肺結核及び其の他の結核性疾患等である。滿五歳から九歳に至る迄のものを總括したものに就いて、矢張り数の多いものから次第に擧げて見るに、此の方は腦膜炎が最も多く、之に次ぐのが肺炎及び氣管枝肺炎であり、更に下痢及び腸炎之に次ぎ、それより、肺結核及び其の他の結核性疾患、腎臓炎、外因死、ヂフテリア等が、之に次いで居る。兩者に於いて其の順序に多少の相違はあるが、大體に於いて一致して居ると云つてよい。

下痢及び腸炎に依る死亡は、統計に依るも年齢小なる者程其の數多く、年長するに共に次第に減少して居る。されば四歳に於いて其の死亡數が最大であつたものが、其れ以後に於いて稍々其の順位が落ちて居るのは當然のこゝである。下痢及び腸炎は生れつきの體質にも依るが、勿論衛生と體育に依つて其の大部分は救済し得るものである。腦膜炎に依る死亡數が、第一位若しくは第二位を占めて居ると云ふ事は、眞に驚く可き事であること云はねばならぬ。何となれば腦膜炎は、たゞへ幸にして死を免るゝこゝがあるにしても、多くの場合其の個人の生涯に互る低能白痴等を貽す恐る可き疾患である

から、最も警戒注意を怠らぬやうにせねばならぬ。第二位と第三位を占むる所の肺炎及び氣管枝肺炎も亦、呼吸器官の平素の保護を鍛錬に依つて、其の大部分は之に罹患する事なくして濟む性質のものである。第四位及び第五位を占むる所の腎臓炎は、之を統計上の小分類に就いて見る時は、急性腎臓炎と慢性腎臓炎とに分れて居り、幼少の頃は、前者著しく其の數多くして後者は極めて少いが、青春以後は之に全く反對の傾向を取つて居る。而して幼少の頃に多き急性腎臓炎は多くは他の疾患に續發するものであつて、之も亦養護よろしきを得れば多くは之を避ける事が出来る性質のものである。第四位及び第七位を占むる所の肺結核及び其の他の結核性疾患は、零歳と一歳とに於いては、殆んそ其の死亡數に軒輊が無いが、唯僅かに一歳の方に多く、それより四歳に至る迄は次第に減少する。五歳から九歳に至る迄は矢張り一括して統計されて居るから各年齢に就いてはよくは分らないが、恐らくは四歳五歳の頃は、七十歳以後の老年期を除けば、人間の全生涯中最も結核性疾患少き時期に屬するものやうである。それにも拘らず四歳五歳に於ける諸種疾患の死亡數中に於いては、第四位又は第七位と云ふが如く其の割合甚だ高きもの一つである。加之此の時期は兒童が次第に家庭より出で、多數の人々に接觸し始むる頃であるから、幼弱にして結核に對する免疫性薄き此の時期にあつては、恐らくは結核に感染する事甚だ多く、それが多くは潜伏したまゝに經過して青年期の頃に至つて急に爆發するのではなからうかと思像せられる。されば幼稚園期に於いて、十分に身體を鍛錬し、其の抵抗力を増進せしめ、且つ極力注意して其の感染の機會を少からしめる事は、極めて大切な養護上の勉めである事は云ふ迄もない。次に外因死も亦第五位及び第六位を占めて、其の數相當に多きものなる事を見るのである。されば此の時期に於ける健康教育中、怪我なきに對する注意も亦、相當重要なものであると云はなければならぬ。次にデフテリアは第六位及び第七位を占めて居るが、之は元より傳染病であるから、豫防上の注意を十分にすることによつて避け得られる所のものである。

元より以上述べた死亡率の外、罹病率をも知る必要があるのではあるが、據る可き確かな統計がないから、已むなく茲には説き及ぼさない事とする。

以上統計的に觀察し來つた所のものに依つて、幼稚園期にあつては、小中學期に比し、一層體育を重視すべき必要があり、而して體育の重視に依つて、其の時期に於ける幼兒の疾病及び死亡を著しく輕減せしむ可き可能性十分なる事をも、確認し得られた事と思ふ。

#### 四

尙茲に附言せなければならぬ事がある。それは經驗の印銘特に深く且つ永續性大なる幼稚園期に於ける知育及び德育の効果が、他の初等教育期、中等教育期或は専門教育期に於けるものに比すれば、一層重大なるものある事は言ふ迄もない事であり、而して一步此の初期に於ける知育及び德育を誤れば、よく千里の差を生じて、其の後代に及ぼす危険ミ損失も亦一層重大なるものある事も勿論の事ではあるが、併し體育の道を誤る事に依つて、其の個人の受くる不幸損失に比すれば、それは遙かに小さいものであると云つてもよい。勿論性情等に及ぼす教育を誤つたが爲めに、遂に其の個人の一身を滅さしめるに至るやうな事も無いではないが、併し幼兒期に於ける體育の缺陷が、其の個人生涯の健康を損傷し、或は遂に其の死を來さしめる事屢々なるに比較すれば、其の個人に及ぼす危険は遙かに少いと云つてもよい。されば幼兒期に於ける體育の重視は、教育上特に高調せられなければならぬ事と思ふ。

然らば幼兒教育に於ける體育は、如何なる方針如何なる方法に依るべきであるか。それは小學教育或は中等教育等の體育に比して、相當違つた特色を持つて居らなければならぬ。併し本篇は唯幼兒教育に於ける體育の重要性を述べただけの積りで筆を執つたのであるから、其の方法等に至つては又他日の機會に譲りたいと思ふ。